

『ラジオ』

著：朝丘 戻

ill：麻生ミツ晃

あのころ裕次さんは俺が買い物をしていると、必ず「これが拓人っぽい」と選んでくれた。歯ブラシも茶碗も箸も。

それらはたいてい透明か青色で、どこことなく鋭いイメージやデザインのものばかり。

歯ブラシは青かったし、茶碗はガラスだったし、箸は一匹の鳥のシルエット柄のものだった。羽をすぼめて一直線に獲物へむかっていくような、迷いのない姿の。

——どうして鳥？

俺が訊くと、裕次さんは得意げに微笑んで心から幸せそうにこたえてくれた。

——この凜とした感じが拓人っぽいからだよ。

裕次さんと半同棲していた数週間、俺はその箸をつかい続けた。彼が作ってくれた手料理を食べながら幾度となく、凜とした鳥、と反芻した。時間が経つにつれ右手が重たくなっていくような感覚に襲われたのも、遠い懐かしい記憶だ。

俺たちが別れた雨の夜から六年が経つ。

彼の家においてきてしまったあの俺っぽい箸は、彼の手で捨てられていたらいいな。そして当時どこへいくにも一緒だった日々の温かい思い出だけが、彼の胸のなかに生き続けていたら嬉しい。強くそう思う。

1日目

「……え」

それだけ言うと、俺は正面に座っているマネージャーの黒井さんを見つめたまま停止した。

「拓人、お、怒った……？」

初めて会ったときから薄々感じていたけど、黒井さんは意外と包容力がある。ダサい黒縁眼鏡の軟弱童顔で、普段は言うことなすこと突拍子もないド天然なのに、忘れていたころ唐突に優しさをくれるから苦しくなる。……とくに、こんな優しさなら尚更だ。

左手をふって、俺は笑顔を繕った。

「ううん、ごめん大丈夫。驚いただけだよ」

「本当に……？　じゃあ再来週のラジオのゲストは恵さんに決定でお願いね？」

「はい」

うなずいて、その名前を心のなかで復唱する。

恵裕次——モデルの俺がドラマ『白の傷跡』で共演した俳優だ。同性愛をテーマにした物語で

恋人役を演じた。そして本当に好きになって別れた人。

「じゃあ改めて企画の内容を説明するね。今回は『白の傷跡』の再放送に便乗しておこなう、月曜日から金曜日までの五日間連続企画だよ。テーマにそったメールやファックスを募集して、恵さんと一緒にリスナーの質問にこたえたりします」

「はい」

「恵さんは来月公開する映画の宣伝も兼ねてきてくれるけど、ラジオの経験はないそうだから拓人がしっかりサポートしてあげてね。これまで頑張ってきた成果を見せてあげるんだよ」

「わかった」

手もとのスケジュール表にある月曜から金曜までの欄に棒線をひいて“裕次さんゲスト”と書いた。

裕次さん。

——め、恵裕次っ！

——……榊、拓人？

——初めまして、榊です。今日は、アポもとらずに、いきなりきてすみません。じつは先日、俺のところにドラマの出演依頼がきたんですけど、その件でどうしてもあなたに会いたくて。今日が無理なら日を改めますから、俺とサシで話してくれませんか。

——サシなんて、なんかヤクザみたいだな。……ま、べつにいいよ。

彼のあの、サングラスの端を掴む細くて長い指。ずっと高い鼻筋。深い色の目。

——俺のことは“裕次”でいい。

あの笑顔。

「裕次さんって、ラジオにでたことなかったんだね」

名前を口にしたのはひさびさだった。

「そ、うだね。うん、そうみたい。そう聞いたよ。宣伝活動でテレビにでるタイプの俳優さんでもないしね」

頬をひきつらせて笑う黒井さんの動揺が、こっちにまでダダ洩れで苦笑いになる。

「たしかにイメージじゃないな。裕次さんのファンも、あの人がバラエティ番組にでたりしたらびっくりするだろうし」

『白の傷跡』でも制作発表の記者会見と雑誌のインタビューをただけだった。

「でもそれなら、今回裕次さんがラジオにでるって知ったら期待する人が多いってことだよ。俺もいつもより緊張感持ってやらなきゃな」

「拓人、」

「テーマにそったメールとファックスって言ってたけど、特別にコーナーつくったりするの？そこはまだ未定？」

「あ、うん、未定かな」

「なら俺も一緒に考えさせてもらおう」

手帳に“コーナー要相談”と書き足す。自分の指を見ながら、絶対忘れないのに書いてる、と思った。俺も動揺してるのかもしれない。“裕次さんゲスト”の字も妙に目にひっかかった。彼の名

前を手で書いたのは初めてだった。

——拓人は俺に、かけがえのないものをいくつもくれてるよ。拓人は嫌かもしれないけど、俺は傍にいたい。だからせめて、ドラマのなかでは、恋人でいさせてくれないか。

——俺は、海を演じなくても……裕次さんの恋人に、なれるよ。

恋人でいられたのは撮影中の三ヶ月間。

——裕次さん、ごめんなさい。……裕次さんを、守りたくて。でも俺、こんなふうにならなくて、できなくて。

——俺は幸せだったよ。……この三ヶ月とっても幸せだった。拓人が幸せにしてくれたんだよ。

六年も経つのに、案外鮮明に憶えてるもんだな。

「拓人……あの、」

黒井さんが叱られた子どもみたいな目で俺をうかがいながら口ごもる。

「どうしたの？」

「いや……うん……」

ふいに部屋のドアがあいて、社長の堀江さんが入ってきた。俺たちを見るなり肩を落とす。

「なんなのきみたち、またぼくの部屋で打ちあわせ？ どうしてミーティングルームをつかわないかなあ……黒井君いじめなら参加したいけど、今日いじめてるのは拓人なんですよ？」

「しゃ、社長っ、人聞き悪いこと言わないでくださいよっ」

「とぼけるんじゃないよ黒井君。拓人に断られたらどうしようってビビってたくせに。どうせぼくに加勢してほしかったんじゃないの？」

「そっ……そんな、ことは、」

狼狽える黒井さんと、いやらしく笑う堀江さんを見ていてピンときた。ふたりはこの仕事の件で、俺に話す前に相談してくれていたんだ。

当時早朝の河原で抱きあっているところを週刊誌にすっぱ抜かれて揉めたりもしたからな。俺のメンタル面以外に関しても堀江さんたちが慎重になるのは当然だ。いろいろ気づかわせて、なんだか……本当に申しわけない。

「拓人、どうするの。断る？」

堀江さんが俺の座っているソファの肘かけに腰をおろして、顔を覗きこんできた。

「いえ、受けますよ。もう迷惑かけるようなこともしません」

「ふーん……」

俺を見る目が細くなる。

「拓人。この企画は黒井君が提案してとおしてきたんだよ。ドラマの再放送が決まってから、ラジオのスタッフと上の人間に持ちかけて、頭さげてさ。普通マネージャーなんかしゃしゃりでないってのに」

「え……黒井さん、本当に？」

驚いてふりむくと、黒井さんは俺を見据えて膝の上で拳を握りしめた。

「……決めてたんだ。いつかまた絶対に、拓人を恵さんに会わせてあげようって。それが俺の使

命なんだって」

「使命って」

「だいぶ遅くなっちゃったけど、でも、俺も恵さんと仕事してるときの拓人がまた見たかった。だから、俺の夢でもあったんだ。……ひき受けてくれて嬉しい。楽しみにしてるよ」

恵さんと仕事してるときの拓人が見たかった、という言葉に秘めている劣等感を刺激された。

「そうだねえ。恵さんはいまの拓人を見たらどう思うのかねえ……」

いまの俺。いまの、俺は。

「まあ、はりきってやってきなさい。ぼくもいろいろと覚悟しておくから」

夜七時。

ひとり暮らしのマンションへ帰りつくと、駐車場に移動して車へ乗った。

堀江さんに借りている外国車は、ふたり乗りの小さくてまるっこいデザインも気に入って、暇さえあれば乗りまわしている。堀江さんいわく『黒井君と同棲したら近所に買い物へいくためのセカンドカーにする予定だけど、その夢が叶うまで貸してあげてもいい』とのこと。そろそろ五年近く経つので、いくらか払ってゆずってもらおうとたくらんでいる。

まだ春にもかかわらず陽気は不安定で、今夜は湿気って蒸し暑い。エンジンをかけてエアコンの風むきを調整し、前髪を掻きあげながら発進する。

免許をとったのは十八の冬だ。大学合格してすぐ教習所にかよひ、ストレートで取得した。

以来、海にも山にもいった。眠れない夜、あてどなく走って早朝の街を眺めることもある。あの日みたいに。

車に乗っていると、どこにでもいけそうな気がする。

昔、狭い世界で生きていた俺を、星と街の美しい光のもとへ連れていってくれた裕次さんのハンドルを握る腕、アクセルを踏みこむ長い脚、時々俺を捉える目と、唇の左端を持ちあげて微笑む横顔も、意識のすぐ傍に蘇ってきて寄り添い続ける。

箱根方面へハンドルをきり、車内もやっと快適になってきたなと思っていたら、鞆に入れていたスマホが鳴りだして応答する前に切れてしまった。しかたなくコンビニの駐車場にとめて見ると、母さんからの留守録がある。

『拓人？ 今日いちご買ったからとりにきなさい。傷む前にね。じゃ』

またか……。

大学進学を機に実家をでてから、母さんは事あるごとに“きなさい”と連絡してくる。

“洗剤買いすぎたから”“田舎からお米届いたから”“父さんの墓参りにいくから”

相変わらずの突っ慳貪な物言いといい、天の邪鬼な母さんらしい。……仕事の愚痴がたまっているのかな。それとも、ひとりで淋しいのか。

友だちをつくるのが苦手な母さんにとって、息子の自分は数少ない味方なんだと知っている。スマホをジーンズのポケットへしまい、いちごか、と考えた。たぶん長くは保たないな。

ひとまず今夜は無理だし近々いこう、と決めて車をおりた。ついでだからコンビニで飲み物と

お菓子を買う。帽子……は、まあいいや。最近ドラマほど目立つ仕事をしていない。

冷房のきいた心地いい店内で買い物をすませて車へ戻った。コーラをひと口飲んでドリンクホルダーにペットボトルをおき、再び出発。上空で白く発光して輪郭ごとおぼろににじむ月を、あの人もどこかで眺めているだろうか。

——恵さんは来月公開する映画の宣伝も兼ねてきてくれるけど、ラジオの経験はないそうだから拓人がしっかりサポートしてあげてね。

黒井さんのひとことが頭の隅を掠めた。

どんな気持ちでこの仕事をひき受けてくれたんだろう。

別れたあともドラマや映画に休みなく出演して結果を残していった彼は、またたく間に画面越しの遠い存在になってしまった。恋人同士だったことも妄想なんじゃないかと疑いたくなるぐらい住む世界の違いと隔たりを感じる。現在の彼の心境は、俺にはなにもわからない。

車の速度を落として高速をおり、外灯の少ない暗い道路をすすんで、砂利で滑る山道へ入る。ライトを頼りに曲がりくねった道をのぼると、やがてたどりついた駐車場へ停車した。

彼が連れていってくれた星の場所は探しあてられなかったけれど、かわりによく似た夜景スポットを箱根に見つけて時折かよっていた。それがここだった。

コーラをもう一度飲んでからエンジンを切り、車をおりる。土と草木の匂いを生ぬるい風が薄めて、肌がかすかな暑気になじんで汗ばんできたころには虫の声に聴き入っていた。

今夜は空気がガスっていて夜景もかすんでいるうえに、星もぼやけた点でしかない。だけどきたかった。星空はあの人を近くに感じさせる。

群青色の夜空、やわい星、ぼんやり浮かぶ街の灯。

……海。海なら、岡崎とどう再会する？

訊いたところで答えはもらえないとわかっているのに、なんだかおセンチな気分になって、あのころみたいに縋ってみたいくなった。でも俺はもう草薙海じゃないし、海本人も死んでいる。死人に口なしだ。俺に用意されたセリフはなかった。

六年経過したいまあの人を前にして、自分が、自分の言葉でなにを言うのか、言えるのか、まるで想像がつかない。

どんな顔をして会えばいいんだろう。どんな顔をして彼は現れるんだろう。

笑顔を見せてくれるだろうか。新しい恋人の話をされたりするだろうか。今度再婚するんだ、と報告を受ける可能性だってあるのかもしれない。俺は笑えるんだろうか。

——……拓人、愛してるよ。離れても想ってる。この気持ちがあれば、俺は生きていけるよ。

魔法使いで旅人で変態で、寂しがりやな兎だったあの方は、六年前の彼だ。

——拓人は、強い子だよ。ダイヤみたいにかたくて、輝いてる。

あの方の目に俺が輝いて見えていたのも六年前。

なんにせよ、いまだったことに運命めいたタイミングを感じずにはいられない。

俺も裕次さんに話しておきたいことがあった。会わないといけない、とっていたんだ。

俺のラジオ番組は毎週金曜日、深夜十二時から一時まで生放送している。

再来週は五日間も枠をジャックして『白の傷跡』の企画をすると告知したら、早速リスナーからたくさんのファックスやメールが寄せられた。ドラマで俺を知ってくれた人も多いせいか、俺と裕次さんのひさびさの再会を待ち望んでくれる声は想像以上に多かった。

「いいねえ、きてるねえ」

ディレクターの丹下さんが数枚のファックスを機嫌よく眺めながらにやける。

「どんな感じですか？」

訊ねつつ俺もファックスに手をのばしたら、さっとよけられた。

「だーめ。今回は拓人と恵さんのリアルな反応が見たいから、ふたりには直前まで質問内容を教えないよ。楽しみにしてろよ〜？」

普段リスナーから届くメッセージは俺もすべて目をとおしたあとに紹介させてもらっている。採用できなくてももらった声を把握しておきたいからだ。

「見せてくださいよ」

「駄目だっつもの。ドラマ放送したのも何年も前なのに、みんな熱いわ〜……」

椅子に仰け反ってファックスを読んでいる丹下さんの、でっばった腹が揺れている。

「リスナーがくれた声を知らないままっていうのは嫌なんですけど」

「企画が終わったら全部読ませてやるよ。拓人に都合いい質問だけだとつまらないし、回答を用意したら反応にリアリティがないだろ？ 恵さんと相談しながらこたえたほうが面白い」

「失言しそうですね、それ……」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ」

むしろ失言狙いだよ、って感じのこの卑しい顔。

「リスナーのことは信じてるけど、変な質問がきてもそればかり選ばないでくださいね？」

「まあまあ。俺さ、『白の傷跡』が放送してたころの雑誌インタビュー好きだったんだよねー。ふたりして痴話喧嘩したり褒め千切ったり、漫才みたいでさ」

「……はあ」

「インタビュアーも“クールで知られてる恵さんのイメージが変わった”とか言ってたろ？ あれを再現したいんだよな！」

丹下さんが言っているのは、たぶん俺たちがつきあい始めたころのインタビュー記事だと思う。俺がしどろもどろ焦って“裕次さんを恋愛感情で好きだ”と洩らしそうになっても、彼が巧みにごまかしてくれた。恋人になってふたりしてはしゃいでいた。おたがいの立場に危機感を抱きながらも幸せだけに浸ろうとしていた、浅はかで無邪気だった時期。

「俺はもうあんな失礼な態度とりませんよ」

「なにかしこまっちゃってんのよ〜。朝っぱらから抱きあってるところスクープされるぐらい仲よかったんだろ？」

丹下さんの口もとがいやらしくゆがむ。下卑た偏見がちらついてうんざりする。

「たしかに世話にはなりました。でもあの人には友だちじゃなくて、尊敬する俳優なんです」

「可愛いこと言っちゃって。ドラマの記者会見でもいちゃいちゃしてたじゃねーか〜」

「丹下さん、なんでそんないろいろ知ってるんですか……」

「さてはおまえ、ひさびさに恵さんと会うからビビってんな……？ どうせ男同士なんだし酒でも呑みやあまた仲よくなれるよ。初日は顔あわせかねてばーっと呑もうな！」

がはがは笑う丹下さんが勢いよく肩を叩いてくる。

「らしくねーぞ拓人、あんときとおなじ調子でいこうや！ な！」

それから一週間、事務所で仕事をこなして過ごし、とうとう『白の傷跡』企画ラジオ放送、開始当日になった。

「拓人、顔ひきつってない？」

打ちあわせを終えてソファに座っていると、構成作家の越野さんに笑われた。

「どんだけ緊張してんの」

「拓人ずっとこんななんだわ～。越野、活入れてやってよ」

丹下さんも一緒になって呆れる。

「や、すみません、大丈夫です、全然」

適当に笑って返したら黒井さんと目があつた。なにも言わずに唇をひき結んで、俺をまっすぐ見据えたまま力強くなずく。

……正直なところ、目の前で起きているすべてに現実感がなかった。それこそドラマか映画を観ている気分で、みんなの会話や行動が自分の外側を滑っていく。二組の取材陣がきているスタジオは人も多く、いつにない違和感まですさまじい。

視線をさげて、右の掌を握って、ひらいて、息をつく。海は本当にいないんだな。俺が自分を見失ってもできないことをしてくれたり、言えないことを伝えたりしてくれた海はいない。

ならばせめて、あのころの自分を演じるための台本が欲しい。そしてあの人が望む、榊拓人らしい自分になれたらいいのに。俺はあの人の前でどんな人間だったんだっけ。十七のころの俺ってどんな奴だった……？

「でもどんな人なんでしょうね、実際」

「あ？」

「恵さんです。丹下さんも面識ないんですよね？」

「あー、ないなあ。業界うけはいいよな。一般的にはクールでとおってるけど、礼儀正しくてスタッフ思いで仕事もしやすいとか。悪い話をまったく聞かない」

「近ごろはスキャンダルっぽいのも全然ですもんね。何年か前に拓人と噂になったぐらい？」

「あれな！」

「ゲイドラマでゲイのスキャンダルって、笑うっきゃないですわー」

「俺も笑った笑った。話題づくりあからさますぎてな～」

丹下さんと越野さんが俺をうかがいながら苦笑いする。俺も愛想笑いでながしたけど、笑顔になれた気がしない。

「けどオフアールした直後に恵さんひとつ返事で快諾して、仕事調整までしてくれたじゃないです

か。あのときやっぱりいい人だなーとは思いましたね」

「そうだな、企画が決定したのも急だったし、結構無理してくれたよな。まー、そこらへんは拓人効果だろうけども。——なあ、拓人？」

え。

「恵さん、入られまーす」

どき、と心臓を緊張が貫いた。思考が追いつかないまま、ひらいたドアの外へ全神経が集中する。

「お、いよいよか」

「楽しみですなー」

丹下さんと越野さんも目を輝かせて席を立った。俺も遅れてソファから立つ。

A Dの佐野さんがドアを押さえて頭をさげ、人をむかえるようすを注視していると、廊下のほうから足音や話し声が響いてきた。複数人の気配がこちらへむかってくるのがわかる。くる。

「——失礼します、おはようございます、恵です」

さっ、と現れた長身の存在感と、ひと声と、気さくな笑顔に意識を呑まれた。

裕次さん。

——それでも俺は拓人を一番失いたくなかった。もう、失いたくなかった。

いる、本当に。きてくれた。

裕次さんがここに。

「遅れてすみませんでした。みなさん、五日間どうぞよろしく申し上げます」

両手脚をきちんとそろえて、彼が頭をさげた。

「恵さんお待ちしてました、こちらこそよろしくお願いいたします！」

丹下さんたち以外のスタッフも恐縮して、裕次さんとマネージャーの筒井さんに挨拶をする。続く他愛ない会話に応じる、その横顔。

最近発売された雑誌でベリーショートだった髪は伸びていたけど、一緒に仕事していたころよりはやや短めにまとまっている。顔つきは変わった。骨格に皮膚がなじんで締まり、風格と色気が深まった。真正面にいても、画面のなかのべつ世界に生きている幻めいて感じられる。

この人が俺の大事な人。三ヶ月間、一生ぶんの恋をした男。

「拓人」

彼がふりむいて、満面の笑みをひろげて近づいてきた。

「ひさしぶりだな、会いたかったよ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>